

学 位 論 文 題 名

国際合弁企業の経営と知識創造

学位論文内容の要旨

本論文は、日系国際合弁企業を対象とする実証研究によって、国際合弁企業のマネジメントに関する理論構築を目的としている。

企業間競争のグローバル化にともない、わが国でも多くの企業が、存続と成長の有効な手段として海外企業との合弁事業を展開するようになった。しかし、国際合弁事業は、資本的に独立した2社以上の企業の提携であり、その関係は不安定であり、成功裡にマネジメントされている事例は決して多くはない。

この国際合弁事業の展開は、両親会社と国際合弁企業が事業展開の中で培った独自の優位性を発展させる、すなわち、知識を獲得、活用、創造するプロセスとして捉えることができる。このように国際合弁事業を捉えた場合、近年、急速に発展している組織的知識創造モデル（以下「知識創造モデル」と略記）は、国際合弁企業のマネジメントを分析するための極めて有効な視角であると考えられる。

そこで、本論文では、国際合弁企業のマネジメントを分析するための視角として知識創造モデルを採用し、次の5つの課題を達成する。5つの課題は、(1)国際合弁企業の知識創造プロセスを規定している環境とナレッジ・イネーブラー（促進要因）の特定化、(2)地域別および出資比率別の知識創造プロセスのパターンの比較、(3)知識創造プロセスと成果の相互関係の解明、(4)知識創造プロセスの動的展開の解明、(5)国際合弁企業のマネジメントに関する実践的な提言である。

本論文は5章から構成されている。

第1章では、国際合弁企業のマネジメントの研究が必要とされる背景、および本研究の5つの課題を提示する。

第2章では、先行研究の検討にもとづいて、本研究の理論的枠組を導出する。

第3章では、環境状況とナレッジ・イネーブラー—知識創造プロセス—成果間の関係に関する仮説を提示するとともに、仮説を検証するために日系国際合弁企業436社から回収された質問票データの定量分析を試みる。この定量分析では、仮説の検証に加えて、

国際合弁企業における知識創造プロセスの地域別、出資比率別のパターンの比較も試みる。

第4章では、トヨタ自動車とGMの合弁企業として設立されたNUMMI (New United Motor Manufacturing, Inc.) のマネジメントの事例分析を試み、国際合弁企業において、知識創造プロセスが「なぜ」そして「どのように」展開されているかを解明する。

第5章では、第3章の定量分析および第4章の事例分析の結果にもとづき、国際合弁企業のマネジメントの特徴を命題として整理する。さらに、本研究の意義と今後の研究課題に言及する。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 小 島 廣 光

副 査 助 教 授 岩 田 智

副 査 助 教 授 岡 田 美 弥 子

学 位 論 文 題 名

国際合弁企業の経営と知識創造

1 本論文の概要

本研究は、日系国際合弁企業を対象とする実証研究によって、国際合弁企業のマネジメントに関する理論構築を目的としている。

国際合弁事業の展開は、両親会社と国際合弁企業が事業展開の中で培った独自の優位性を発展させる、すなわち、知識を獲得、活用、創造するプロセスとして捉えることができる。このように国際合弁事業を捉えた場合、近年、急速に発展している組織的知識創造モデル（以下「知識創造モデル」と略記）は、国際合弁企業のマネジメントを分析するための極めて有効な視角であると考えられる。

そこで本論文では、知識創造モデルを中核とする理論的枠組に則して、国際合弁企業のマネジメントを実証的に分析している。具体的には、(1)国際合弁企業の知識創造プロセスを規定している環境とナレッジ・イネーブラーの特定化、(2)知識創造プロセスと成果の相互関係の解明、(3)知識創造プロセスの動的展開の解明、(4)分析結果にもとづく国際合弁企業のマネジメントに関する実践的な提言の4つの課題を達成している。

本論文は5章から構成されている。

第1章では、国際合弁企業のマネジメント研究が必要とされる背景、本研究の目的および研究方法を説明している。

第2章では、国際合弁企業のマネジメントに関する先行研究のレビューを試み、基本的な論点を整理し、本研究の理論的枠組を導出している。理論的枠組は、①環境/ナレッジ・イネーブラー、②SECIプロセス、③国際合弁企業の成果の3つに大別される諸概念から構成されている。

第3章では、日系国際合弁企業436社から回収された質問票データの定量分析を試み、環境/ナレッジ・イネーブラー—知識創造プロセス—成果間の相互関係に関して、以下の5つを含む合計22の興味ある仮説が支持されている。(1)不確実性が高い製品市場で事業を行う合弁企業の場合ほど、知識の共同化はより広範に展開される。(2)日本本社の合弁事業調整能力が高い合弁企業の場合ほど、知識創造プロセスはより広範に展開される。(3)アジアと中国の合弁企業の場合には、欧米の合弁企業の場合よりも知識の共同化がより広範に展開される。(4)日系合弁企業全体の知識創造は、知識の表出化のプロセスを重視する日本企業の知識創造よりも、知識の連結化のプロセスを重視する欧米企業の知識創造により近い。(5)知識の表出化、連結化、内面化が広範に展開される合弁企業の場合ほど、日本本社が獲得するスキル・能力はより高い。

第4章では、トヨタとGMの国際合弁企業として設立されたNUMMIのマネジメントの事例分析を行っている。分析の結果、国際合弁企業のマネジメントと知識創造に関して、次の4つの仮説が開拓されている。(1)生産技術管理に関わる知識は形式知が中心であり、人的資源管理に関わる知識は暗黙知が中心である。(2)国際合弁企業の知識創造プロセスは、両親会社の知識移転と融合のプロセスである。(3)国際合弁企業の成果は、国際合弁事業を通じて両親会社と合弁企業が創造した3つの知識によって構成される。(4)国際合弁企業の高い成果は、SECIプロセスとナレッジ・イネーブラーの広範な展開によって実現される。

第 5 章では、第 3 章の定量分析および第 4 章の事例分析の結果にもとづき、国際合弁企業のマネジメントの特徴を合計 26 の命題として整理している。最後に、本研究の意義と今後の研究課題に言及している。

2 本論文の評価

本論文の学術上の貢献として、次の 4 点をあげることができる。

第 1 に、国際合弁企業のマネジメントを分析するための知識創造モデルを中核とする独自の理論的枠組を導出している点である。国際合弁企業における環境状況/ナレッジ・イネーブラー — 知識創造プロセス — 成果間の全体的な相互関係を解明する理論的枠組は、国際合弁企業を含むさまざまな組織の現象を説明し、記述する点で優れている。このような理論的枠組を導出したことは、本論文の重要な貢献である。

第 2 に、この理論的枠組に則して、詳細な定量分析と事例分析を試み、国際合弁企業のマネジメントの特徴を正確に解明している点である。定量分析と事例分析を併用する方法論は、経営学研究において推奨されているが、その実行は必ずしも容易ではない。本論文は、この方法論を積極的に採用することにより、すぐれた研究成果を達成している。

第 3 に、多くの理論的・実践的含意を提示している点である。詳細な分析結果は、未解明の問題を解明し、この研究分野の大きな知的資産となろう。同時に、分析結果は、国際合弁企業のマネジメントのための実践的示唆に富んでいる。

第 4 に、研究対象の重要性である。今日、企業間競争がグローバル化するにともない、わが国でも多くの企業が、存続と成長の有効な手段として海外企業との合弁事業を展開している。しかし、国際合弁企業が成功裡にマネジメントされている例は、決して多くはない。国際合弁企業のマネジメントの解明が要請されている現在、本研究は極めて時宜を得たものである。

以上のように、本論文は高い学問的価値を有するが、問題点もある。

第 1 に、第 3 章の定量分析において、データの収集が国際合弁子会社に限定されている点である。国際合弁事業の展開は、日本の親会社、外国の親会社、国際合弁子会社の 3 社による事業展開であり、両親会社からのデータの収集は不可欠であろう。

第 2 に、両親会社の知識変換のスパイラルと国際合弁子会社の知識変換のスパイラルとの相互関係が、必ずしも十分解明されていない点である。この点の徹底した解明は重要である。

しかし、これらの不十分さは、今後さらに研究を深める際の課題であり、本論文の学問的価値を損なうものではない。

3 結論

以上の評価にもとづき、われわれは本論文が博士（経営学）の学位を授与するに値するものであることを認める。